

『臨濟録』助字考

塩 見 邦 彦

禅の語録に関する研究が、にわかには新生面を拓くようになったのは、ここ戦後の三十年のことにすぎない。

というふうな表現をすると、わが国の禅研究者のいく人かからは非難の声があがるに違いない。

確かに、わが国の禅の語録に関する研究は古くから行なわれてきたし、また現在、それらの研究成果の恩恵に浴していることも否定できないし、それらのことを、ことさらに無視しようとしている訳でもない。にもかかわらず、私が敢えてここで「戦後のことにすぎない」と断定したのは、およそ次のような理由があるからである。

その第一は、敦煌写本を利用する便宜が国際的に拡大され、禅の語録の生れた時代と、その時代の言語に対する研究が、長足の進歩をとげたこと。

『臨濟録』助字考（塩見）

その第二は、禅の語録を宗派の教典としてではなく、まず文献として正確に読みとることの努力と研究が長足の進歩をとげたこと。

その第三は、禅の語録研究が、思想・語学・文学等の専門を越えて、共同の作業へと展開しつつあること。

以上のことをふまえた上で、私はここで『臨濟録』の中に表われたいくつかの「助字」を中心に論を進めようと思う訳であるが、その理由は、唐代の禅の語録の大半が、当時の口語を使用していることから、まず唐代の口語を調査することが大切であり、口語と文語との違いが最も截然としているものは助字であることから、いま『臨濟録』に限って、その特徴的なものを挙げてみようとしたものである。

『臨濟録』助字考（塩見）

「語録」が「語録」として成立するための、その最も中心をなすものは、問答形態からくる二者（その多くは師と弟子と）の会話の緊張関係にあることはいくらまでもない。つまり、「語録」を真に理解するためには、その応酬が行われた状況における論理と共に、「語録」を「語録」として成立せしめている問答のニュアンスまで読みとる必要があると考えている。

以下、『臨濟録』に表われる主なものを例挙し、ほぼ同時代の「語録」と、『臨濟録』よりも以前のものと考えられる「語録」に見えるものをできるだけ参考にしつつ考察しようと思う。

「助字」については、清人劉淇氏が『助字辨略』の序文でいう如く、

構文之道、不過實字虚字兩端、實字其體骨、而虚字其性情也。

なのであるが、しかるに、その「性情」であるが故に、従来は、いわゆる漢文読みにひきずられ、ニュアンスよりも意味に重点をおく傾向として読んできたといつてよいであろう。その最もよい例として、次の字を挙げることで

きる。

「判」は漢文読みでは「判ける、おさめる、判れる」等と読んでいるが、『助字辨略』では「與拌同、俗作揀」と説明し、『詩詞曲語辭匯釋』巻五では「割捨之辭、亦甘願之辭、自宋以後多用拚字或拚字、而唐人則多用判字」と説明し、次のような詩の例を挙げている。

縱飲久判人共棄、懶朝眞與世相違

（杜甫「曲江對酒」）

肯藉荒庭春草色、先判一飲醉如泥

（杜甫「將赴成都草堂途中有作先寄嚴鄭公」）

已判到老爲狂客、不分當春作病夫

（白居易「酬舒三員外見贈長句」）

これらの「判」は、いずれも従来の漢文読みのような「判ず」ではなく、「うちすてて」と読まなければならないものである。

「先判」は「すべてを忘れ」（平凡社『唐代詩集』上）では不充分であるし、「已判」は「どうともなれ」という意に解釈しなければならぬだろう。

あれこれと「判」について書いたが、従来の漢文読みが、どれ程読み、ひきづられているかについて、その一端

を確認しておきたかったにすぎない。さて、それでは本論に入ろう。

○好——『臨濟録』では句末の助字として使用されるが、元来は『祖堂集』巻第六にも見える「師曰、正好焼却」とか「師云、与麼則正好著力」とか、巻第十一の「師云、恰好據驗」のように、単独で使用された用法である。古くは婉曲に義務や当然を表わしたようであるが、『臨濟録』中の三例とも「莫：好」の照応形式であられる。

僧云、老和尚莫探頭好。

(僧がいう、「老師、さぐりを入れなさんな。」)

師云、莫道無事好。(二例)

(師はいつた、「事なく済んだといいなさんな。」)

これらは、いずれもおだやかな禁止の表現であって、従来、応々にして「：莫くんば好し」と読みならわしているようであるが、そのように読まない方がよいことは言うまでもない。

○在——句末に使用され強意を示す。この「在」については、既に入矢義高氏による詳細な考証がある(講座禅第六巻月報「禅語つれづれ(六)」を参照のこと)ので、ここ

『臨濟録』助字考(塩見)

では『臨濟録』中に表われるもののみを挙げよう。

瞎屨生、索飯錢有日在。(二例)

(このめくらめ／が飯代れを請求さる日必ずあるぞ。)

索草鞋錢有日在。

(わらじ代を請求される日が必ずあるぞ。)

喫鐵棒有日在。

(鉄棒をくらう日が必ずあるぞ。)

飯頭云、猶恐少在。

(飯頭がいう、「まだ少ないかと思っているのだ」)

師云、更要第二杓惡水潑在。

(師はいう、「更に第二杯目の汚水を掛けようと思っているのだ。」)

向後穿鑿成一株大樹、與天下人作陰涼去在。

(今後鍛練して一本の大樹となり、世の中の人々の

為に涼しい木かげを作ってやるのだ。)

已後有一人佐輔老兄在。

(やがて、そなたを補佐する人があろうぞ。)

已後坐却天下人舌頭去在。

(今後世の中の人々の口をふさぐことにはなろう)

ぞ。）

以上の如く、全て句末に使用される「在」は強意以外の何ものでもなく、それらと同様の例は、他の語録にも散見する。

他日盡被閻老子拷你在。（伝心法要）

（いずれお前たちはみなきつとエンマ様にひっぱかれるぞ。）

閻羅老子未放你在。（龐居士語録）

（エンマ様はお前を許しはせぬぞ。）

等を示せば充分であろう。この「在」が、文献の上でも早く見えるのは『遊仙窟』である。

若冷頭面在、生平不熨空。

他家解事在、未肯輒相瞋。

定知心肯在、方便故邀人。

また、唐詩にも次のようにみえている。

鳳池冷暖君諳在、二月因何更有冰

（白居易『和韓侍郎題楊舍人林池見寄』）

入矢氏も指摘される如く、このような「在」は、「これを『在り』と読む必要はないし、そう読むではいけないのである。」

○在——句末の「在」ではなく、動詞のあとに付く「在」は、本来の「在る」「在らしめる」意味から少しづれて、現代中国語でいう「介詞」——つまり前置詞として働く。

你道落在什麼處。（三例）

（お前はどこにおちこむと言うのか。）

猶如觸鼻羊逢著物安在口裏、：

（たとえば鼻づらをぶつつけてゆく羊が物に逢うと口の中に入れるようなものだ。）

しかし、このような「在」と同様の用法のものとしては「似」がある。それらは『祖堂集』では、「話似」、「見似」、「舉似」、「呈似」、「説似」などがあり、

本来は前置詞であるが、動詞と結合したものである。

『詩詞曲語辭匯釋』卷三では、羅鄴の宮中詩「今朝別有承恩處、鸚鵡飛來說似人」を挙げ、その説明として次のように云う。「此説示之義。説似人、即説與人或説向人也。」と。『臨濟録』では、次の四例である。

説似一物則不中。

（何かについて言えば、もうそれは的是はずれた。）

普回舉似師。(三例)

(普は帰って師に報告した。)

更にまた、『助字辨略』卷三では「似如也、何似、何如也」という。この「何似」は『祖堂集』に六例あるが、それらはいづれも二つのものを比較する場合に使用されている。『麴居士語録』にも同様の例を見る。

昨日相見、何似今日。

(先日の会見は、今日のと比べてどうですか。)

以上みてきた「在」「似」は、いずれも前置詞として働らいていることが判る。

○太：生——「生」が語助であり、「太」と「生」の間には形容詞が入るが、『祖堂集』の十二例の中には「太与麼新鮮生」(卷第七)のように副詞まで加わる場合もある。

『臨濟録』では次の五例である。

太。麴。生。(二例)

(ひどい荒っぽさだ。)

太多生。

(多すぎる。)

『臨濟録』助字考(塩見)

子這一問太高生。

(君のこの一問は、高すぎる。)

太。無。禮。生。

(ひどく無礼であるぞ。)

「生」は『詩詞曲語辭匯釋』卷二にもいう如く、「語助辭、用於形容語辭之後、有時可作様字或然字解」なのであるが、また、それについては、宋人歐陽脩が『六一詩話』の中で次のように述べている。

李白戲杜甫云「借問別來太。癩。生、總爲從前作詩苦」、太。癩。生唐人語也。至今猶以生爲語助、如作麼生・何似生類是也。

唐代における「作麼生」の外典での非常に少ない用例としては、

白髮應全白、生涯作麼生。

(貫休、「懷周朴・張爲」)

がある。

『神會語録』では「作勿生」となったり、「作沒生」となる例がみられる。(問、作沒生得見無物)

「何似生」は『祖堂集』に見える。

『臨濟録』助字考（塩見）

師云、見何似生。（卷第十八）

（師はおっしやった、「どのように見るのかね」と。）

それは、また『敦煌變文集』に四例見出し得る。しかし、次の宋代になると、詩に多く使用されはじめる。

只今夏熱已如此、若倒秋高何似生。

（楊萬里「夏夜誠齋望月」）

青春已在殘紅裡、更著渠濃何似生。

（楊萬里「雹」）

新春易失遽如許、薄官忘歸何似生。

（陸游「春請」）

唯、「何似」と「何似生」の違いは、「何似生」が二つのものを比較する場合には使用されないということである。

○斷——『臨濟録』では、次の二例を見出しうる。

坐斷報化佛頭、……

（報化仏の頭をふみつけて……）

一念決定斷。

（一念に決定し切ってしまう。）

『詩詞曲語辭匯釋』では「斷猶盡也、煞也、極也、住

也」とし、「坐斷」を「猶云占住或把住也」として

以上のことから、動詞の後に付く「斷」は動作を強く定着させる方向の助字のようにみうけられるのである。そのように考えれば、「斷」は「却」や「了」とほぼ同様の用法であることが判る。

○破——山僧竟日与他說破、學者綫不在意。

（私はひねもす彼等に説きあかしているが、修業者達は全く問題にしてくれぬ。）

師云、祇徒踏破草鞋。

（師はいう、「わらじをすりきるうと思うだけです。」）

この「破」は、いずれも動詞の後に付いて、動作の徹底的遂行を示している。『祖堂集』にも「打破」とか「點破」などというのがあるが、いずれも右の用法と同じである。

○地——「地」はいうまでもなく土地・場所の意であるが、副詞的修飾語として使用するようになった。現在の中国語の副詞を構成する助字と同様であると考えるとよ

く、『臨濟録』にも約十例を数える。『祖堂集』には「背地」(こっそりと)、「驀地」(とつぜん)、「特地」(わざわざ)などの用法があり、また「底」とも音が通ずる所から「驀底」とも表記されている。しかし、『臨濟録』のように「××地」と三音節に延びる型は、まだ表われておらず、そのような時には「恬恬底」とか「索索底」のように必ず「底」を使用している。ところが『臨濟録』では「××地」の用法が、その全てであると考えてよい。

「忙忙地」(あたふたと)

「波波地」(あたふたと) (二例)

「隨隨地」(ぐづぐづと)

「噤噤地」(おしだまって)

「靈靈地」(はっきりと)

「可可地」(かなりに)

「漫漫地」(はてしなく)

○著——この助字も口語の用法としては最も普遍的なものであるから、これの例文を挙げることはひかえて、便宜的に一・二例を挙げるにとどめよう。というのは、動詞の後に使用される「著」と、命令を示す「著」とがある

『臨濟録』助字考(塩見)

からである。

動詞の後につく「著」——『臨濟録』に使用されているのは、ほとんどそうであるが——は「著」本来の意味を多少なりとも残している用法である。

如蒿枝佛著相似。

(あたかも蒿の枝でなでられたかのようにであった。) 眞俗凡聖、與此人安著。名字不得。

(眞俗凡聖は、この人に名をつけることはできない。)

しかしまた「著」には、命令を示す「著」があることも知らねばならない。

道流、你莫認著箇夢幻伴子。

(修業者たちよ、君たちは夢のおともを認めてはならぬぞ。)

このような用法は、早く『祖堂集』にも表われている。

倒却門前刹竿著。(卷一)

(門の前の旗竿を倒してしまえ。)

これと同じ表現が『伝心法要』にもある。

『助字辨略』卷五に「著、方言語助也」として李商隱の

『臨濟録』助字考（塩見）

詩を挙げていることから、恐らく晩唐頃から使用しはじめられた助字であったのであろう。

○看——この「看」も動詞の後に使用され、命令または丁寧な勧誘を表わすものと考えてよく、使用例は無数である。従来「看ん」と漢文読みをしているのは誤りである。

對衆證據看。

（皆の者に対してはつきりと証明してみよ。）

你自返照看。

（お前自らが本来のものにかえてみよ。）

汝但舉看。（三例）

（お前はひとつあげてみよ。）

一句臨機試道看。

（このカンどごろを試みに一句云ってみよ。）

そしてこれらの用法は「：看」と「試：看」の用法として『祖堂集』には早くから表われるものである。

○他——名詞に冠せられる軽い助字で、「他^{かれ}」とか「他^{その}」などという第三人称の代詞ではない。『臨濟録』では、全部で十七例あるが、その一・二例を挙げよう。

妨他別人請問。

（他の人の質問の妨げとなるぞ。）

恐滯常侍與諸官員、昧他佛性。

（恐らく常侍や諸官員に累を及ぼして、その仏性をくらますことにならう。）

以上、『臨濟録』に見える代表的な助字について述べ、それらの諸例とほぼ同時代の類似した用例をも例示したが、本来ならば、それらの助字が、それ以後どのように変化していったのか、あるいは変化しなかったのかについて述べなければならぬ所である。しかしながら、それは次の機会に譲ることとし、今回は『臨濟録』とその周辺に限らざるを得なかった。もっとも、その周辺に限ったとはいっても、なお十全な探索を必要とすることは云うまでもない。残された課題のあまりに多いことに、私自身がとまどっているといった方が正確であらう。同学諸士の指正をお願いする次第である。

注一

なお、この「在」については、呂叔湘「釈景德伝燈録中在、著二助詞」（漢語語法論文集、一九五五）入矢義高「句終詞在」について——呂叔湘氏の論考への批判」（中国語学研究会会報一四、一九五三）を参照。

尚この小論は入矢義高氏より多大の御教示を受けました。紙面を借りて深く感謝の意を表する次第です。